

# 福井県議会ブラジル訪問団報告書

## (ブラジル福井村入植 60 周年記念式典参加)

日 程 令和5年8月4日(金)～8月11日(金)

訪問地 ブラジル連邦共和国 サンパウロ州

### 福井県議会ブラジル訪問団

福井県議会議長	西 本 正 俊
福井県議会議員	畑 孝 幸
福井県議会議員	小 堀 友 廣
福井県議会議員	西 本 恵 一
福井県議会議員	兼 井 大

(随 行)	福井県議会議会局次長	松 本 伸 江
	福井県議会議会局総務課主任秘書	江 守 紀 章

福井県議会ブラジル訪問団日程  
(ブラジル福井村入植 60 周年記念式典参加)

月 日	日 程
8月4日(金)	福井発⇒小松空港発(10:15)⇒羽田空港着(11:25)(NH754) 羽田空港発(12:10)⇒成田空港着(13:30) 成田空港発(18:00)⇒シカゴ(オヘア空港)着(15:55)(NH0012) ※ NH0012 便が1時間遅れで発着 NH7256 便が翌日10:00発に変更となったため、 シカゴ市内泊に変更 <p style="text-align: right;">&lt;シカゴ市泊&gt;</p>
8月5日(土)	シカゴ(オヘア空港)発(10:00)⇒サンパウロ(グアルーリョス 空港)着(21:50)(NH7256) <p style="text-align: right;">&lt;サンパウロ市泊&gt;</p>
8月6日(日)	9:00～10:00 福井村先没者慰霊法要 10:00～15:00 福井村入植60周年記念式典 15:00～15:30 福井村日本語モデル校見学 <p style="text-align: right;">&lt;サンパウロ市内泊&gt;</p>
8月7日(月)	9:00～9:30 開拓先没者慰霊碑参拝(イビラプエラ公園) 10:00～11:30 サンパウロ州議会表敬訪問 14:00～15:00 サンパウロ市議会表敬訪問 16:00～17:00 在サンパウロ日本国総領事館訪問 <p style="text-align: right;">&lt;サンパウロ市内泊&gt;</p>
8月8日(火)	10:00～11:00 アルジャ市長・市議会表敬訪問 11:00～11:30 大安寺公園視察 11:30～12:00 アルジャ市会館、アルジャ日本語学校訪問 15:00～16:00 ジャパン・ハウス視察 <p style="text-align: right;">&lt;サンパウロ市内泊&gt;</p>
8月9日(水)	9:00～10:00 日本移民ブラジル上陸記念碑視察 13:00～14:00 日本移民資料館視察 サンパウロ(グアルーリョス空港)発(21:00)⇒
8月10日(木)	⇒ニューヨーク(ニューアークリバティ空港)着(5:35)(NH7215) ニューヨーク(ニューアークリバティ空港)発(10:35)⇒
8月11日(金)	⇒羽田空港着(13:35)(NH7545) 羽田空港発(17:05)⇒小松空港着(18:05)(NH755)⇒福井着

※時間は現地時間

※飛行機の遅延により、当初の予定から変更あり(赤字)

## コロニア・ピニャール（福井村）入植60周年記念式典

- 1 日 時 令和5年8月6日（日）9：00～15：30
- 2 場 所 福井村（コロニア・ピニャール）、日本語モデル校（福井村内）等
- 3 参加者 [福井県議会]  
西本正俊議長、畑孝幸議員、小堀友廣議員、西本恵一議員  
兼井大議員、松本次長、江守主任秘書  
[福井県]  
豊北教育長、大塚産業労働部副部長、谷口国際経済課企画主査
- 4 同席者 [福井県関係者]  
J A福井県 齊藤代表理事組合長  
J A越前たけふ 土本代表理事組合長  
J A福井県中央会 新田参事  
福井県立大学 石丸教授  
[福井村等関係者]  
コロニア・ピニャール文化体育協会（福井村） 西川修治会長 等  
福井県文化協会（ブラジル県人会） 西村純子会長 等  
[来賓] ※福井県関係者以外  
山内隆弘 在サンパウロ日本国領事館領事部長  
片岡龍之介 JICA ブラジル所長代理  
渡辺悟 サンミゲール・アルカンジョ市議会議員（同市長代理）  
古河シルビオ 聖南西文化体育連盟会長  
ヴィクトル・リッピ ブラジル連邦議員

### 5 概 要

コロニア・ピニャール（福井村）に到着し、コロニア・ピニャール文化センターにおいて、先没者慰霊法要に出席し、献花を行った。

引き続き、「コロニア・ピニャール入植60周年記念式典」が同文化センターにおいて行われ、約300人の福井村関係住民が参加する中で、福井県訪問団も来賓等として出席した。

まず、西川修治祭典委員長（コロニア・ピニャール文化体育協会会長）が挨拶し、「福井県からの慶祝使節団を迎え、60周年を盛大に祝うことができたことを感謝するとともに、二世の時代に入った福井村がさらなる発展をすることを願う」と語った。

次に、来賓祝辞が行われ、豊北教育長は、「1962年に14人の福井県出身者が入植して以来、南米の気候、風土、文化、習慣などの違い等の様々な困難を乗り越えて、ブラジル社会の発展に大きな寄与を果たしてきたことを称え、先駆者の労苦に敬意と感

謝の意を表したい」と挨拶し、来年新幹線が福井県内に延伸することや恐竜博物館のリニューアルにも触れ、福井県にもぜひ遊びに来ていただきたいと話した。

西本議長は、「福井県からのブラジルへの移住者、そして福井県に住むブラジルから移住された方々が、双方の架け橋になってほしい」と述べ、今後も福井村をはじめ、ブラジルと福井県の相互の交流や発展を支援すると語った。

畑議員（福井県議会日伯友好議員連盟会長・福井県日伯協会会長）は、「建築や農林業など多分野にわたる技術研修生がブラジルから福井県を訪れる中で交流も深まってきており、今後も多くの参加をお願いしたい」と挨拶した。

J A福井県の齊藤代表理事組合長は、「世界の農業を取り巻く環境は、地球温暖化や環境問題など様々な課題を抱えているが、福井県人の血が通う同胞として、農業を通じた新たな産業が生み出せるきっかけづくりを皆さんと構築したい」と語った。

また、ブラジル側の来賓からも祝辞が披露された。在サンパウロ日本国領事館山内領事部長は、福井村の人々が、入植者としてこれまでの困難を克服し着実な発展と地位を築いたことへの敬意を表し、「日本で就労している日系人のためにも、両国の協力関係強化の役割を果たしていただくことを期待する」と述べた。

片岡 J I C A ブラジル所長代理は、これまでの入植後の施設等の建設、農業事業資金等の支援などに触れた他、日系ボランティアの受入れ先としてコロニア・ピニャール日本語モデル校の協力への感謝を述べ、「今後の J I C A 事業を日系団体と協力して推進していく」と語った。

渡辺サンミゲール・アルカンジョ市議会議員は、「日伯交流や経済、文化の発展に貢献している福井村は当市にとって大きな存在である」と市長の言葉を紹介した上で、「立法機関として、行政機関とともに、日系人と協力しながら、当市を更に発展させることを誓う」と挨拶した。

リップ連邦議員からは、「福井村の皆様の人生に対する姿勢や、責任をもって高品質なものを生み出す国民性が我々の手本となっている」との敬意の言葉とともに、税制改革による今後の日本からの投資の増加や農協との協力による農業の更なる発展への期待を述べた。

次に、福井県、福井県議会、福井県日伯友好協会、福井県 J A グループから福井村に対し協力金を贈呈した。

更に、入植 60 周年感謝状贈呈式が行われた。第一次入植者であり、在伯県人の地位向上や福井村発展に貢献した織田真由美氏、現地からの入植第一号であり、果樹栽培技術や栽培指導、福井村代表者として村づくりに貢献した山下治氏に対し、豊北教育長から感謝状が贈呈された。

式典終了後は、コロニア・ピニャール文化センター前にて記念植樹を行った後、会場を体育館に移して開催された記念祝賀会に出席した。今年度の全伯太鼓大会で優勝した和太鼓部「飛翔」の演奏や、日本語学校の生徒たちによるリコーダーなどの演奏、訪問団も飛び入りし会場一体となつての「ふるさと」の大合唱等が行われた。

その後、訪伯団はコロニア・ピニャール日本語モデル校を訪問し、子どもたちの作文の発表の観覧や教室内の見学等を行った。

### 《訪問議員による所見や提案》

- ・多くの福井村の方々から熱烈な歓迎を受け、入植から 60 年が経過した今なお、二世や三世の方からも、福井県、日本に対する親交の念が高いことに感動を覚えた。
- ・こうして訪問することで、移民の苦労や現状を十分に理解できた。訪問したからこそ知り得たこともあった。初期の入植者からは、40 日間の船旅を経てブラジルに渡ったこと、密林や山林の土地を購入して開墾し、果樹栽培に取り組んだこと、子育てをしながらの作業であったことなどの苦労話を聞いた。新天地への思いが、こうした苦労を経て実を結んでいることに感銘を受けた。
- ・移民の家族の努力、日本語学校の大きな働きもあり、日本語とポルトガル語を話すことができるバイリンガルの子供たちが多く、福井県や日本を理解する土壌があると感じた。
- ・福井村が、福井県とブラジルの架け橋として大きく貢献いただいていることが分かった。
- ・「飛翔」太鼓は、伝統文化が守られつつ青年から幼児まで幅広い年代が意欲的に一つの活動をしている姿が印象的であり、日本人の DNA が受け継がれていることに喜びを感じるとともに、日本でのこうした地域活動を活性化するヒントになり得ると感じた。
- ・日本語モデル校での子どもたちの発表は、日本、ブラジルの双方の価値観、性格、習慣、文化の相違などを的確に表現していた。今後も、福井県との関係が継続していくことを確信するとともに、ICTでの交流など、コロナ禍を経た社会環境変化にも対応しながら、両国の次世代による交流を深めていく重要性を感じた。
- ・県民に福井村や技術研修生の交流がほとんど知られてないことは課題であり、危機感を感じる。今後も様々な世代での交流を深めるとともに、今後の訪問時には、福井村での宿泊や体験の交流も行いながら、日本の伝統文化の継承をはじめ、農業、医療・福祉の現状等も調査し、県民へ伝えることが重要と考える。



先没者慰霊法要



福井村入植 60 周年記念式典への参加者



福井村入植 60 周年記念式典



西川祭典委員長挨拶



豊北教育長祝辞



西本議長祝辞



畑議員（日伯友好議員連盟会長・日伯協会会長）祝辞



協力金贈呈



感謝状贈呈（織田氏）



感謝状贈呈（山下氏）



記念植樹



「飛翔」太鼓演奏



日本語モデル校（子どもたちの作文発表）



日本語モデル校（高椋小の作品展示）



日本語モデル校（教室内の視察）



日本語モデル校（児童との交流）



## 開拓先没者慰霊碑参拝

- 1 日 時 令和5年8月7日（月）9：00～9：30
- 2 場 所 イビラプエラ公園内（サンパウロ市）
- 3 参加者 [福井県議会]  
西本正俊議長、畑孝幸議員、小堀友廣議員、西本恵一議員  
兼井大議員、松本次長、江守総務課主任秘書  
[福井県]  
豊北教育長、大塚産業労働部副部長、谷口国際経済課企画主査
- 4 同行者 ブラジル福井県文化協会  
西村純子会長、川崎省三副会長、山下広治副会長、西川修治相談役 他
- 5 案内者 ブラジル日本都道府県人会連合会  
谷ロジョゼ眞一郎 氏

### 5 概 要

慰霊碑に参拝、献花（事前に供え）、慰霊碑の地下にある祭壇に線香を手向け、参拝記録簿に記帳、先没者の方々のご冥福を祈念した。

（参考）慰霊碑の完成は1975年8月22日。黒御影石で田中角栄首相による「開拓先没者慰霊碑」の碑銘が入っている。完成の序幕式には日本から福田赳夫副総理らが出席して行われた。地下の霊安室には、平和観音像、物故者過去帳、各県人会別の過去帳が収められた。また後に、日本から観世音菩薩と地藏尊像が贈られた。

今回、県人会連合会谷口氏から、毎年6月18日のブラジル日本人「移民の日」に、日系社会の代表者たちが集まり追悼法要が営まれること、戦前移民のうち船内で病気により亡くなって上陸できなかった500名の名簿を映した墓標も備えられていること、奉られている無縁仏は1,000人ぐらいと言われていることなどを伺った。





参拝



谷口氏から慰霊碑に関する説明を受ける



地下祭壇に参拝



参拝簿への記帳



慰霊碑前



慰霊碑前（全員）

## サンパウロ州議会表敬訪問

- 1 日 時 令和5年8月7日（月）10：00～11：30
- 2 場 所 サンパウロ州議会庁舎（サンパウロ市）
- 3 参加者 [福井県議会]  
西本正俊議長、畑孝幸議員、小堀友廣議員、西本恵一議員  
兼井大議員、松本次長、江守総務課主任秘書  
[福井県]  
豊北教育長、大塚産業労働部副部長、谷口国際経済課企画主査
- 4 同行者 ブラジル福井県文化協会  
西村純子会長、川崎省三副会長、山下広治副会長、西川修治相談役 他
- 5 応対者 サンパウロ州議会  
Oscar Osamu Hiramatsu 氏  
August Takeda 氏  
Alexandre issa kimura 氏  
※当初予定していた中島マルシオ議員は弔事対応のため欠席
- 6 概 要  
州議会議事堂の案内とともに、州議会の議事の進め方等について説明を受け、意見交換を行った。（以下のとおり）

### [本会議場前のロビー]

- ・議案に対する与党と野党の協議の場所でもある。
- ・本会議場入口前のプレートには、第15回サンパウロ州議会（2006年当時）のメンバーが記されており、議長、第1書記、第2書記、副議長の4人の他、議員の名前が刻まれている。改選ごとの同じようなプレートが議会内の各所にある。
- ・日本では議員から行政の長になる場合があるが、ブラジルでは議員は議員として職を全うするケースが非常に多い。このプレートに記されている議長のガルシア氏は、昨年まで州知事を務めた珍しいケースである。

### [議場]

- ・サンパウロ州議会は、議員が94名である。議員数はブラジルの州で一番多く、サンパウロ州の人口の多さ、経済規模もブラジル1（仮にサンパウロ州が国だとすれば世界21位）という現状を反映している。
- ・議員が座る両脇には、それぞれの党の補佐官が待機する席があり、議事中に相談

ができ、議席の卓上に設置されたシステムを用いて議員同士で連絡を取り合うことができる。また指紋認証が採用されているため、議員本人でなければ投票はできない仕組みになっている。投票結果は、議場前方のモニターに映し出されるなど、積極的に新しいシステムを導入している。

- ・一方で、議場に入った議員は自筆のサインをする必要がある。
- ・サンパウロ州は、1つの党が強く、20数年間、議長はその党からしか出ていなかったが、ここ数年は、他の党から議長が誕生するようになった。その議長が、システムの導入や、議長席を一番高いところから中段の位置に変更するなどの新しい試みを行った。議長席の位置は、そのまま現在に至っているが、議員の圧力の軽減や急な改革への反発を避けるため、ときどき元の位置に戻ることもある。
- ・第1書記は、野党第1党等から選出して、バランスをとっている。
- ・法案を通過させるに当たっては、最低6時間は討議しなければならないルールがある。ただし、党首同士の話し合いで短くすることはできる。
- ・各党の党首は、前方の演説台に上がり、自党の考え方や意見を5分間主張する。他の議員も事前申請の上で、賛成や反対の意見を含めて10分間主張ができる(党首は総論、議員は各論という分担を行っている模様)。
- ・議席は、政党別に分かれている。
- ・後方傍聴席には、報道機関が入り、リアルタイムで報道ができるようにしている。
- ・豊北教育長から、「理事者はどこに座るのか」という質問があり、Takeda氏から「行政の長官が直接議場に立つのではなく、各委員会の中で議論や報告を行う。委員会の書記が毎月委員会の内容を報告している」と説明を受けた。
- ・西本議長は、「歴史や伝統を大切にしながら最新設備も整っているサンパウロ州議会を福井県でも参考にしたい」と語った。
- ・畑議員は、「6時間討議をすることで議論は充実すると思うが、日本は根回しの文化があり議論は比較的短く、全会一致がより望ましいとされている」との見解を述べた。
- ・議会専属のテレビ局(記者、カメラマン)がある(今回の訪伯目的、訪伯しての印象、今後の日伯交流の目指す姿などについて、議長、畑議員に取材)。

#### [委員会室]

- ・女性問題などテーマ別の委員会を設置している。
- ・委員会の裁決を2つ経た上でなければ、議案の投票はできないこととしており、議場で議論が分散しないようにしている。
- ・議員席は向かい合わせの座席としている。従前は学校方式で並んでいたが、それでは話し合いができないとして改善した。
- ・委員会の常任委員からの質問があれば、出席している行政の長官は自分で答弁しなければならない(長官の席は、委員席の傍の一段高いところ)。
- ・立法府による行政府の監視機能として質問が行われるものであるが、建前としては、議会が行政に対する諸問題を述べるものであり、追及するものではない。
- ・行政の長官は、半年に1回、行政の課題、進捗状況を説明しなければならない。

- ・所属外の委員も出席できるが、5分程度しか話ができない。
- ・誰でも傍聴できるが、報道機関も含め議員エリアには入ることはできない。

この他、歴代議長の写真が飾られた通路、議員執務室（1議員に1つずつ確保）、補佐官室、各党党首による議案調整用の会議室などの案内を受けた。

#### 《訪問議員による所見や提案》

- ・約4,000万人の州人口に対し、議員は94名と比較的少数であり、一方で政党も多いとこのことを聞き、幅広い議論がされていると感じた。
- ・法案に対する討議の時間が長くとられており、委員会では行政長官が傍の席に座ることからも、質問が中心ではなく、議員間討議中心の議会運営であると考えられる。そのために、議員には、補佐官も含めて、政策に係る調査や立案能力が求められると思われる。議員間討議は、本県議会も積極的に取り組むべきと考える。
- ・採決表示や通信、指紋認証等のシステムは先進的で審議の効率化にも資すると思われるが、今後、本県議会に同様なシステムを導入しようとする場合、導入費用の問題や会議規則等との整合性、また、このようなICTを手段としてどのように活用できるかを十分検討する必要があると考える。
- ・議員だけでなく職員としても日系人が多く、政治の仕組みは違うが、多くの人種が集まる国において日系人が調整役として重要な仕事をされている現状に、ボーダレス化の進む現代社会において次世代の県民が活躍するためのヒントをいただいた。
- ・「高校生県議会」や子どもたち向けの事業に、これまで以上に国際化に関する内容を増やす必要があると感じた。
- ・今後の訪問時には、地域住民の政治への関わり方、予算や法案の制定の仕組み、職員の体制を詳しく調査するとともに、今後の目指すべき地方自治の在り方などテーマを絞った意見交換を行い、本県の参考にしてはどうか。



議場前ロビー（議員名のプレート）



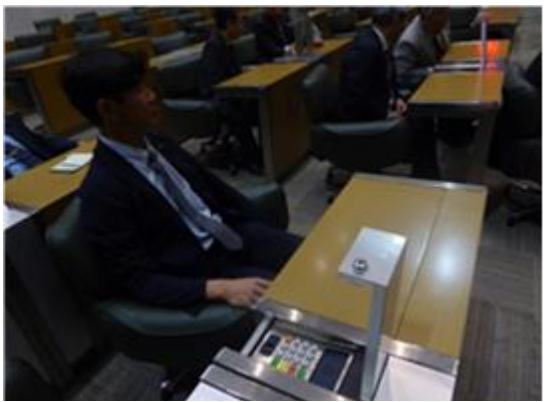
議場前方風景



議場後方風景



議場横側風景



議席および採決等のシステム端末



議場演説台（挨拶）



議会テレビ局の取材



通路（歴代議長の肖像画）



委員会室全景



委員会室（壇上は行政長官席）



委員会室の議員席



議員執務室前（中島マルシオ議員）



議員執務室内



各党首による議案調整用の会議室

## サンパウロ市議会表敬訪問

- 1 日 時 令和5年8月7日（月） 14：00～15：00
- 2 場 所 サンパウロ市議会庁舎（サンパウロ市）
- 3 参加者 [福井県議会]  
西本正俊議長、畑孝幸議員、小堀友廣議員  
兼井大議員、松本次長、江守総務課主任秘書  
[福井県]  
豊北教育長、大塚産業労働部副部長、谷口国際経済課企画主査
- 4 同行者 ブラジル福井県文化協会  
西村純子会長、川崎省三副会長、山下広治副会長
- 5 応対者 ジェオルジ・羽藤 サンパウロ市議会議員

### 6 概 要

羽藤議員の案内により議場を見学後、議長の執務室で意見交換を行い、豊北教育長と西本議長が福井県代表として記帳を行った（来客があった際にサインを残してもらう習慣があるとのこと）。

（以下のとおり ※特に記載がなければ、全て羽藤議員の発言）

#### [議場]

- ・議員立法と行政立法があるが、いずれも議場で討議の上で可決されれば、市長が署名して公布する流れとなる。
- ・サンパウロ市議会は、議員が55名であり、毎年12月までが任期である。
- ・市の予算は約200億ドルである。人口1,200万人と大都市であり、南半球でも最大の都市である。
- ・日系人は多く、サンパウロ州で約200万人、サンパウロ市で約40万人である。
- ・市議会において、広島、長崎、沖縄の戦没者追悼式を開催したところである。
- ・市内では、6月から8月にかけて、日本の屋台などを出すジャパンフェスティバルなど、多くのイベントがあり盛り上がりを見せている。日本食を出す店は、シユラスコ（ブラジル固有のバーベキュー）を提供する店より多いと言われている。他に桜まつり、七夕まつりなど、元々1つの県の移民がやり始め、現在ではサンパウロの一大イベントとなっている日本由来の祭りがある。
- ・イベントでも日系人が調整役となっており、私が日系議員として活動できるのも、サンパウロ市民が日系人に対して恩恵を感じているからである。市会には3人の日系議員がいる。

- ・日伯交流が大変重要な仕事だと思っており、訪日も予定している（後述）。

〔議長の執務室（会議室）〕

- ・議員を集めて調整する部屋であり、特に重要案件では各党の代表を集めて行われる。経済、保健、教育の各委員会の非公式協議なども当室が中心となる。
- ・市議会には55名の議員に対し、15の政党がある。
- ・西本議長から、「1人の議員に対して政策秘書は何人いるのか」との質問に対し、「20名までの秘書が認められている。以前はもっと多かった」との説明があった。
- ・元々医師であるので、政治活動の課題として、事が起きないように予防することを重要な政治信条としている。
- ・スポーツは、体を鍛えるために有用であり、サッカー、スケートボード等の施設の整備や、ブラジルではマイナーであるが野球場の改修の取組みを進めている。
- ・日本の堀米選手（東京オリンピック金メダリスト）にトロフィーを渡したことがあり、良い思い出である。
- ・10月には和歌山、京都など（東京、大阪も経由）に訪問予定であり、日本では必ず見習うべきことを学んでくるので、今回もそれを見つけてブラジルで広めたい。
- ・「福井は「恐竜」が有名だと思うが、どうやって若い人を引き付けているのか」との質問に対し、西本議長からは、「県立恐竜博物館は世界3大恐竜博物館に位置づけられている」と、豊北教育長から、「リニューアルオープン後、20日間で120万人の来客があった。教育の一環として訪問させる場合もある」との説明を行った。
- ・更に、豊北教育長から、福井県のガイドブックを議員に渡し、「来年3月には北陸新幹線が開業して東京から近くなる。恐竜博物館など魅力的な施設も多くあるので、ぜひ福井にも足を運んでほしい」と話した。

この他、サンパウロ市内が眺望できる屋上への案内や市庁舎内に飾られている絵画等の説明も受けた。

《訪問議員による所見や提案》

- ・1議員当たり20名の政策秘書が認められており、本県の知事部局（執行機関）相当の職員が議会側に従事し、州議会同様、議員主体の政策の提案や実行が図られていると推察できる。

（以下、州議会と同じ）

- ・議員だけでなく職員としても日系人が多く、政治の仕組みは違うが、多くの人種が集まる国において日系人が調整役として重要な仕事をされている現状に、ボーダレス化の進む現代社会において次世代の県民が活躍するためのヒントをいただいた。
- ・「高校生県議会」や子どもたち向けの事業に、これまで以上に国際化に関する内容を増やす必要があると感じた。
- ・今後の訪問時には、地域住民の政治への関わり方、予算や法案の制定の仕組み、職員の体制を詳しく調査するとともに、今後の目指すべき地方自治の在り方などテーマを絞った意見交換を行い、本県の参考にしてはどうか。





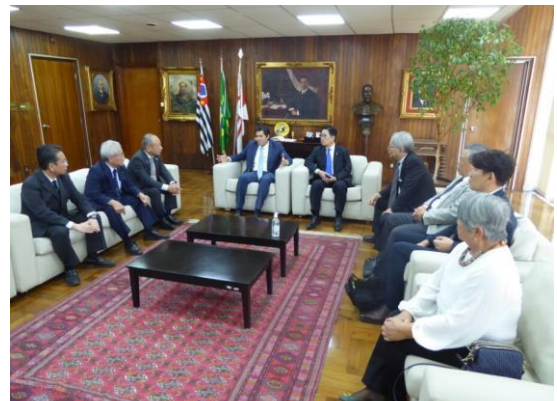
議場壇上（中央が羽藤議員）



議場（説明）



議場



羽藤議員との懇談（議長室）



羽藤議員との意見交換（議長室）



署名（来訪者として）



市庁舎屋上



市庁舎内の大型写真  
（セバスチャン・サルガドのルワンダ内戦の写真）

## 在サンパウロ日本国総領事館訪問

- 1 日 時 令和5年8月7日（月）16：00～17：00
- 2 場 所 在サンパウロ日本国総領事館（サンパウロ市 パウリスト通り）
- 3 参加者 [福井県議会]  
西本正俊議長、畑孝幸議員、小堀友廣議員  
兼井大議員、松本次長、江守総務課主任秘書  
[福井県]  
豊北教育長、大塚産業労働部副部長、谷口国際経済課企画主査
- 4 同行者 ブラジル福井県文化協会  
西村純子会長、川崎省三副会長、山下広治副会長
- 5 応対者 在サンパウロ日本国総領事館  
桑名良輔 総領事、山名隆弘 領事部長

### 6 概 要

まず、西本議長と豊北教育長から、挨拶の中で、ブラジルの発展に尽くした日本からの移民やその子弟への支援や今後の福井県とブラジルとの交流の促進への協力を依頼した。

次に、桑名総領事から、資料に基づきサンパウロの概要について説明を受け、質疑応答が行われた。（以下のとおり）

（桑名総領事）

- ・サンパウロは、日本の各47都道府県のすべての県人会がある。日系人は、ブラジル全体で約200万人、その6割の120万人がサンパウロにいる。世界最大の日系コミュニティがあるブラジルでも、更にサンパウロには集中している。その都市にある当館の業務の半分は日系社会との付き合いと言える。
- ・以前、メキシコ等で勤務していたことがあるが、中南米の他国と比べてもブラジルは、国の規模、農業、資源・エネルギーなど、ポテンシャルが圧倒的であると感じる。
- ・農産物だけでなく、エネルギーに関しても輸出国となった。沖に油田もできており、通常の雨が降れば電源の8割は水力で賄うことができる。洋上風力、太陽光もある。農業との関係でエタノールの開発も行ってきた。エタノールとガソリンを混合して使うという制度が完全に普及し、小型自動車の脱炭素は技術的に完成している。化石エネルギーも自然エネルギーも非常に豊富である。
- ・農業は、二毛作は当たり前で、三毛作が可能なところもある。大豆を収穫したその直後からトウモロコシの植え付けを行い、その収穫後は放牧をしている事例がある。今後は、

I TやA Iを使い、大規模農業でありながら精密農業を行い、耕地面積を広げることなく、生産性は上がるだろう。サトウキビは、砂糖にも、エタノールにもなる。その残った粕を使った「二次エタノール」も製造して販売されており、ほぼ商業化されている。更に、その絞り粕に残る植物性繊維を原料にチップまたはバイオフェューエルにする研究が今進められている。その全てをエネルギーとするプロセスができつつある。

- ・日本はエネルギーを持たず、土地も資源もない国であるため、ブラジルとの関係は重要と感じる。
- ・サンパウロでは、海から鉄道に沿って日系人のコロニーが広がり、それが基礎となり地方の中核都市となった例がある。ブラジルで3本の指に入るメガバンクの「ブラデスコ」の頭取は、戦前に銀行を起し、当初から日系人を相手に取引してきた。日系社会と同時に銀行も育ってきて、必要な労働倫理や文化も植え付けてもらい、日系社会は自分たちのパートナーであるという意識があるという。
- ・他国の日系社会を多く見てきたが、社会の中で薄まっている感じがした。しかし、サンパウロの日系社会は、日本語が話せない人は増えていくが、薄まるどころか盛り上がりを感じる。太鼓、盆踊り、食（焼きそばなど）は、非日系人を巻き込んでいる。盆踊りでは何重にもなり、J-pop やクラブミュージックも流れ、ブラジルの若者も一緒に自由に楽しみ、このような光景は世界でもまれである。ブラジルで花咲いた日系文化である。
- ・現に、サンパウロでは自分が外国人という感じがしない。日系人が当たり前存在し、二世の方も努力して専門職に就いている。責任感など、日本人の気質や性格もビジネスで信頼を得ており、日本人、日系人であるということだけで尊敬され、下駄をはかせてもらっている感じがある。
- ・課題は、日本とのつながりが徐々に弱くなってきていることである。福井県が実施している研修制度は非常に重要であり、継続は当然のこと、拡大して行ってほしい。日系人が日本に行きブラジルに戻ったときに、県人会の活動に参加したり、日本との懸け橋になったりする人が多い。文科省や外務省の制度も含め、今後も多くの若者に日本へ行ってもらいたい。
- ・今後は、短期のビザが免除になるため、ブラジルから日本への観光客が増えると思う。ブラジルの富裕層は非常に裕福であり、そういう人たちは東京、大阪などの大都市には良く行くので、それ以外の選択肢を提案できるかどうか日本側の課題である。福井は魚や米、酒もおいしいと聞き、マーケットとしては良いと思うので、これから準備をしてもらいたい。ジャパン・ハウスも活用してもらいたい。

(豊北教育長)

- ・福井県は、恐竜博物館がリニューアルオープンし、非常に人気があり、食べ物もおいしく、「ZEN (禅)」がヨーロッパでも広がっている。北陸新幹線が来年3月に開業し、東京から福井が近くなる。ブラジルでもジャパン・ハウス等でPRをお願いしたい。

(桑名総領事)

- ・ブラジルでは、新たな流れの宗教が盛り上がり、宗教に限らず新しいものに対して比較的オープンである。「ZEN」や仏教を正面から捉えて学ぼうとする層があるので、

禅の体験ができれば、ブラジルの新しい層を開拓することができるかもしれない。

(畑議員)

- ・以前、サンパウロの街中では、エタノール車から匂いがしたが、今回はそれほど感じなかった。実際はどうか。

(桑名総領事)

- ・エンジンは基本的に変わらないため、匂いは燃料が原因だと思うが、現在では、エタノールの品質はガソリンと同水準であるため、匂いを感じなくなったのだと思う。

(豊北教育長)

- ・ブラジルでは、電気自動車の動きはないのか。

(桑名総領事)

- ・これまで他の方と話題になったことを踏まえると、電気自動車を導入する目的を考えたときに、ブラジルにおける必要性があるのかは疑問である。脱炭素が目的であれば、エタノールで実現可能であり、非常に低いカーボンフットプリント（商品やサービスのライフサイクル全体を通じた温室効果ガスの排出量を表示する仕組み）を達成している。走行中にCO<sub>2</sub>は排出するが、もともと植物が光合成のために大気から吸収したもので、カーボンニュートラル（CO<sub>2</sub>は増えも減りもしない）である。
- ・また、ブラジルは面積が広いので、充電ポイントを作ろうとすれば、かなりのインフラ整備になるが、所得が低い国でもあるため、ハードルは高い。なお、大都市における窒素酸化物等による公害防止のためや、エタノール車がない大型車については導入の可能性はある。

(西本議長)

- ・エネルギーも、食料も自国で賄えるのなら、他の国に頼るところはないのではないかと。

(桑名総領事)

- ・技術と資本だと思う。そういう意味で、日本は技術も資本もあるということで良いパートナーである。過去は、国策でアルミニウムや鉄鋼、大手商社も入ってきた。その後、日本はバブル崩壊やリーマン・ショック等で元気がなく、ブラジルは汚職事件やコロナ禍もあり対外イメージが余り良くない中で、ブラジルへの投資に少し二の足を踏んでいる感じがある。
- ・国際情勢の中でブラジルには隣国との地政学的な脅威はなく、民主主義、法制度、自由といった価値観も先進国と同水準であり、日本としてもブラジルと仲良くしなければならぬと強く感じている。

(西本議長)

- ・来年には北陸新幹線の開業がある。先ほどの富裕層の話を受けて、東京、大阪、京都の

次の目的地として福井を選んでもらいたい。福井は、ブラジル人にはなかなかできない雪の体験もできる。

(桑名総領事)

- ・隠れ家的で開発されていないものがあることは非常に良いと思う。そういう魅力のある場所をブラジルでもどんどん紹介したいと思っている。ジャパン・ハウスは日本政府が運営しているため、そういう場を使って、ステレオタイプではない日本の魅力を発信したいと思っている。情報等をもらえればジャパン・ハウスにつながせてもらう。

(畑議員)

- ・県内在住の外国人では、出稼ぎなどでのブラジル出身が一番多いが、言葉がわからず教える人もいないこと、価値観が異なるなど、子どもの教育が問題として挙がっている。技術交流制度などの活用を模索しているところである。

(桑名総領事)

- ・日伯交流の中では良い話もあるが、出稼ぎの人と日本社会との融合や共存では難しい問題もある。ただし、決定的な解決策はなく、皆が少しずつできることから行っていくことが大事だと思う。
- ・研修員に地方のコミュニティに入ってもらって意思疎通の手助けをしてもらう方法などが考えられる。我々としても、ブラジルから行く人にも意識づけを行っており、日本語や生活風習になじんでもらうことが必要である。

《訪問議員による所見や提案》

- ・世界の中で、ブラジル・サンパウロだけが非日系人も巻き込みながら日系社会が盛り上がっているという話は興味深く、日本人は気質・性格の上に努力もあって信頼を受けながら各業界で活躍していることには誇らしく感じた。特に法曹界や経済界での活躍が印象的であった。今回の各訪問先や県人会の方との懇談でも、こうした話を実感できた。
- ・今後、次世代の県民に対し、こうした話を伝えることが重要であり、在外公館に協力いただき、その役割を担ってもらうことが必要ではないか。
- ・ブラジルは今後の発展に向けたポテンシャルが高いとの評価であった。農業大国でもある一方、サトウキビを原料とするエタノール製造、それを燃料とする小型自動車も走行しており、水力、太陽光、風力、石油もある環境には、日本とは決定的な違いを感じた。土地・資源ともその豊富さは日本とは比較にならないものの、県民ビジョンにも掲げるゼロカーボンを目指す上では、原子力も含め住民の理解を得るためにも、長期的な視点で諸外国の先進事例を国内に展開していくことも必要だと考えられる。
- ・技術研修制度の重要性や日本への観光客増加への見解をいただいたため、北陸新幹線の県内延伸という転換期に、ジャパン・ハウスも活用して国際交流や誘客の施策を強化するよう提案していきたい。
- ・多文化共生を図る上でも、より多くの県民が県内でブラジルを中心とした外国人の方々と交わり、相互に理解を深めるための施策を進めることが重要だと感じた。

(以下、全体行程を通じた内容)

- ・バスで移動する際、広い高速道路の端を自転車が走り、サンパウロやサントスの市街地の道路の中央分離帯や側道には自転車専用道路が整備されており、自転車活用の取組みが大変進んでいた。
- ・ガソリンスタンドでは、ガソリンの半額でバイオエタノールが売られていた。
- ・同行者から、公立大学は授業料がなく、高齢者は交通機関の運賃が無料との話も聞き、教育や福祉の制度において、日本でも参考にできることがあると感じた。



総領事館表敬



西本議長挨拶



桑名総領事説明



日本の書を背景に

## アルジャ市長・市議会表敬訪問

- 1 日 時 令和5年8月8日（火）10：00～11：00
- 2 場 所 アルジャ市庁舎（サンパウロ州）
- 3 参加者 [福井県議会]  
西本正俊議長、畑孝幸議員、小堀友廣議員、西本恵一議員  
兼井大議員、松本次長、江守総務課主任秘書  
[福井県]  
豊北教育長、大塚産業労働部副部長、谷口国際経済課企画主査
- 4 同行者 ブラジル福井県文化協会  
西村純子会長、川崎省三副会長、山下広治副会長
- 5 応対者 アルジャ市長 ルイス・アントニオ・デ・カマルゴ氏  
アルジャ市議会議員 レイナルジーニョ氏  
アルジャ市議会議長 アベウ・フランコ・ラリーニ氏 他

### 6 概 要

エコパークをテーマにした公園の一角にある市庁舎（分庁舎）において、歓迎式典の形式で行われた。当庁舎には、副市長室およびスポーツ担当部署が入っているとのことである。

市長や議員の他、関係者約50人が待機し、バイオリンの生演奏で出迎えを受けた。会場には、大安寺小学校から送られた絵が飾られていた。

最初に、カマルゴ市長からの歓迎の挨拶があり、公式来賓状の進呈を受けた。

次に、レイナルジーニョ市議会議員から、同氏の父が市長として福井県と友好関係を深め、福井県関係者の助言もあり財団の設立をもって病院の建設計画を進めたが、父が亡くなり計画が止まったこと、それを現市長が財団を再設置し市立病院の建設に大きく前進していることが紹介され、福井県への感謝の言葉が述べられた。

次に、ラリーニ市議会議長は、元議員のヨコヤマ氏や建築家の西村純子氏、市に拠点を持つPL教団を例に挙げ、「日系社会は市の発展や市民の生活水準の向上に大きく貢献しており、今後、福井県とアルジャ市の友好関係が深まり、交流が続いていくことを祈念する」と挨拶した。

そして、改めて、カマルゴ市長から挨拶があり、「2021年に市長に就任し3年目となった。福井県との交流を活発化し、今後、更に関係を深めていきたいという強い思いを持っていた。今回、福井県の皆さまをお迎えすることができて光栄である。来年、日本への公式訪問をし、福井県で皆様に再会したい」との思いが語られた。

福井県訪問団代表として豊北教育長から、「アルジャ日本語学校では、大安寺小学校

との交流を続けている。アルジャ市でも引き続き日系人社会との緊密な連携をお願いするとともに、今後とも地域間の交流・協力の促進にお力添えを賜うようお願い申し上げる。また、市長が福井に来られることを計画中ということで、「歓迎したい」と挨拶した。

最後に、アルジャ市との関係の深い畑議員が県議会を代表して挨拶し、父柳沢義孝氏の協力とともに、技術研修生の卒業生がアルジャ市に在住していたことが、福井県と同市や、学校同士の交流のきっかけとなったことを紹介し、改めて歓迎式典の開催への謝辞を述べた。

#### 《訪問議員による所見や提案》

(以下、アルジャ市の訪問先全体分を記載)

- ・市長表敬という形ではなく、市議会など市を挙げて福井県訪問団を歓迎してくれたことには、過去からの友好・協力の経緯や技術研修生の交流、それらの成果が市政を後押ししてきたことがあると感じた。現に大安寺公園周辺の住宅等は、先進的な建築が多いとの印象であった。故柳澤義孝氏の功績は極めて大きいものがある。
- ・アルジャ市内の治安は良いとの状況を聞き、ブラジルの地域ごとの治安の正確な情報を収集し、今後の訪問や民間も含めた交流において安全を確保する仕組みづくりが必要だと感じた。
- ・アルジャ日本語学校がコロナ禍で生徒が少なくなったとのことだが、大安寺小学校との絵の交流が継続されており、同様な事業を拡大することにより、福井県の子どもたちに世界を身近に感じてもらうことができるのではないかと考える。
- ・絵の交流について、「絵にブラジルと日本人の生活が表れている、ブラジルの子どもたちが日本の絵を参考に描いている」との清原氏の話は興味深く、現在はICTを使えば、どんなに遠くてもデータ通信はできるが、今回の訪問を含め、リアルな人・モノの交流には、人の心をより強く動かす効果があり、今後の国際的な経済・文化の交流を進める上でも重要な要素ではないと感じた。





市庁舎前



歓迎のバイオリン演奏



式典



公式来賓状の進呈



カマルゴ市長挨拶



畑議員（県議会代表）挨拶



市長、市議会議長、議員とともに

## 大安寺公園視察

アルジャ市長等の表敬後、市内の大安寺公園に移動し、公園の造園整備を行っている方から説明を受け、記念撮影を行った。

### (大安寺公園の概要)

福井県農協5連会長などを歴任した故柳澤義孝氏（畑議員の父）が農協指導員のブラジル派遣研修を行うなど、技術交流に貢献したことを称えてアルジャ市が建設した日本庭園であり、ブラジル国内で桜の名所としても知られる。建設には柳澤氏が全面的に協力し、1987年に落成した。公園の名称は柳澤氏の生まれ故郷である「大安寺」の地名を冠したもので、同氏が公園の碑文に名称を揮毫している。



## アルジャ市会館、アルジャ日本語学校訪問

- 1 日 時 令和5年8月8日（火） 11：30～12：00
- 2 場 所 アルジャ市会館（アルジャ日本語学校は同会館に併設）  
（サンパウロ州 アルジャ市）
- 3 参加者 [福井県議会]  
西本正俊議長、畑孝幸議員、小堀友廣議員、西本恵一議員  
兼井大議員、松本次長、江守総務課主任秘書  
[福井県]  
豊北教育長、大塚産業労働部副部長、谷口国際経済課企画主査
- 4 同行者 ブラジル福井県文化協会 西村純子会長 他
- 5 応対者 アルジャ市文化協会会長 ジュリオ・ヨコヤマ氏  
アルジャ日本語学校教師 清原みどり氏

### 6 概 要

ヨコヤマ市文化協会会長より、「福井県人会の西村会長の協力を得て、大安寺小学校との絵の交流が始まり、子どもたちの絵のレベルが向上した。アルジャ文化協会は来年90周年を迎える。柔術や野球、社交ダンスなどいろいろな活動をし、たくさんの方が集まっていたが、コロナ禍で人がいなくなってしまった。今、復興させようとしており、今後も頑張りたい」との挨拶を受けた。

清原 日本語学校教師からは、「アルジャの教師になって35年のうち、28年を福井県と交流している。絵の交流においては、絵に生活の様子が現れ、日本の絵は繊細、ブラジルの絵はおおらかでのびのびしている特徴があり、授業で子どもたちは福井県の絵を見ながら描いている。絵の交流ができていて大事さを最近感じており、これからも交流を続けていきたい。日本語を学ぶ子どもは少なくなっているが、日本語を学びたい、日本文化を知りたいという子どもがいる限り、これからの人生をかけて、その文化を絶やささないよう頑張っていきたい」と述べた。

豊北教育長は、挨拶の中で「大安寺小学校とアルジャ日本語学校の絵画交流は、技術研修員を通じたブラジル日系人と福井県民との交流の代表的なものであり、アルジャ文化協会においても、引き続き、日系人への支援、地域間の交流・協力に力添えを賜りたい」と話した。

畑議員は、挨拶の中で、「清原先生に守り続けていただいていることが、この日本語学校が続いている大きな要因だと思っている。絵の交流が始まってから、大安寺小学校の児童のブラジル、ヨーロッパなど異文化への視野が広がった。技術研修制度が復活した中で、今後も両校の絵の交流を続けていきたい」と述べた。



ヨコヤマ市文化協会会長挨拶



清原日本語学校教師挨拶



畑議員（議会代表）挨拶



市文化会館前

## ジャパン・ハウス視察

- 1 日 時 令和5年8月8日（火）15：00～16：00
- 2 場 所 ジャパン・ハウス サンパウロ（サンパウロ市 パウリスタ通り）
- 3 参加者 [福井県議会]  
西本正俊議長、畑孝幸議員、小堀友廣議員、西本恵一議員  
兼井大議員、松本次長、江守総務課主任秘書  
[福井県]  
豊北教育長、大塚産業労働部副部長、谷口国際経済課企画主査
- 4 応対者 施設の案内者（在サンパウロ日本国総領事館を通じて事前依頼）
- 5 概 要  
以下のとおり案内、説明を受けた。

### [ジャパン・ハウスの概要や機能]

- ・サンパウロからラテン・アメリカ全体に向けて、日本の様々な情報を紹介している。
- ・情報発信の仕方は、本館での展示やイベント、ワークショップも行っている。サンパウロ以外でも、展示やイベントを行っている。
- ・オンラインも積極的に活用し、SNSやウェブサイトでの発信にも力を入れている。
- ・障害を持つ方にも楽しんでもらえるよう、レイアウトを分かりやすく説明し、展示への要望などを受け付けている（QRコードも活用）。
- ・入館は基本的に無料である。パウリスタ通りにあることもあり、有料だとのイメージを持たれていたが、それを逆手に無料であることをPRしている。
- ・入館者数は、2017年の開館から通算で約300万人、平均で約10万人/月である。直近は、約15万人/月であった。（学校が休みであった影響もある。）
- ・建築設計は隈研吾氏である。

### [館内施設]

- ・セミナースペース：ワークショップや日本企業との連携や研修なども行っている。利用がない日は、畳もあり、休憩スペースとしている。拡大や分割など自由にレイアウトできるようになっている。
- ・カフェ（藍染めショップ）：女性2人が運営し、日本の本場で味わえるような日本食（「だし」からとるなど）を提供している。ブラジルにも日本食のレストランは多いが、どうしてもブラジル人好みの味付けになってしまっている。

- ・図書館：蔵書に限りがあり、貸し出しはできないが、コーヒー等を飲みながら読書できるようになっている。文化、デザインなど10のテーマ別としており、英語、日本語、ポルトガル語の3言語のものを揃えている。図画のある本を重視している。
- ・JNTO（国際観光振興機構）ブース：ブラジルには事務所がないが、管轄をしているニューヨーク事務所と連携して、週末を中心に各都道府県の情報発信などを行っている。

#### 〔日本商品の販売〕

- ・独立採算事業として日本から輸入した商品を販売している。ただし、制度上、様々な制約があり、全部ではなく一部に限っている。
- ・展示会でミニチュアやおもちゃも販売している。お酒、文房具などもある。
- ・人気商品は酒類である。ブラジル人はお酒を好む。ブラジルを代表するカクテル「カイピリーニャ」は、本来サトウキビのお酒で割るが、日本酒や焼酎で割る店も出てきている。（西本議長の質問に対し）
- ・日本のお菓子や飲み物の試食もでき、お菓子はブラジルより甘さが控えめなので人気がある。米粉を混ぜたチーズパンは、もちっとした感触があってサプライズにもなっている。
- ・いずれも文化の交流を意識しており、情報発信にも活用している。

#### 〔田中達也展〕

- ・田中氏は、写真家、ミニマリズムの表現者であり、「見立て」の作品を紹介している。
- ・作品例1：フェイジョアード（米、豆の料理）を一つのビーチに見立て
- ・作品例2：納豆の箱を日本のお城に見立て
- ・来館者に各作品を紹介しながら、日本の歴史や文化の話に広げるなど、日本の様々な要素に触れてもらい、日本をより詳しく知ってもらう工夫をしている。

#### 〔日本のおもちゃ展〕

- ・日本の伝統的、現在販売のおもちゃについて展示している。（現代のおもちゃは、日本国内でも、最近2～3年発売のものも揃っていた。）
- ・子どもは、見るだけでは物足りないため、奥に実際に遊んでもらうスペースも設けている。
- ・子ども向けの企画として幼少のうちに日本の文化に慣れて楽しんでもらうことを重視している。

#### 《訪問議員による所見や提案》

- ・ブラジル人を中心とする多くの入館者が興味深く日本の展示物や、お土産を手にし、日本への興味や関心が様々な分野に及んでいることを実感した。ブラジ

ル人の好みに寄せた日本ではない、本来の日本人や日本への関心が高まっているということでもあると認識した。

- 日本においても、ジャパン・ハウスの取組みや日本への関心の高まりについて周知するとともに、県内の多様な産業についてジャパン・ハウスを通して世界へ発信することが、県内企業の国際化支援にもつながると感じた。
- 日本中から集められた逸品や洗練された和のテイストがちりばめられており、ブラジルに居ながら、日本の魅力を強く認識できる内容であり、日本の発信がうまく機能していると感じた。
- 広報やPRにおける、このようなギャップ（ブラジルで見せることで、さらに日本を強く意識させる）の効果を実感するとともに、単純な比較はできないが、福井県のアンテナショップにおいては、他都道府県との差別化を図りながら、特にこの店でしか買えないという中身が欠かせないと感じた。



施設正面



田中達也展（見立て）



日本商品の販売、ドリンクコーナー等



図書館



日本商品の販売



セミナースペース



日本のおもちゃ展



日本食のカフェ



## 日本移民ブラジル上陸記念碑視察

- 1 日 時 令和5年8月9日（水）9：00～9：30
- 2 場 所 エミサリオ・スプマリーノ公園内（サントス市）
- 3 参加者 [福井県議会]  
小堀友廣議員、西本恵一議員、兼井大議員  
松本次長、江守総務課主任秘書
- 4 同行者 ブラジル福井県文化協会 川崎省三副会長、山下広治副会長 他
- 5 応対者 ハマダ・ヒロコ氏（同行通訳者）

### 6 概 要

サントス市のエミサリオ・スプマリーノ公園内の日本移民ブラジル上陸記念碑を見学した。

サントス市には、沖縄の移民が多く、沖縄県人会が積極的に活動しており、これは最初の移民の半分が沖縄からの人であったことが理由であること、近年「オキナワサントス」という映画が作られ、戦時中に沖縄の人々が同市内から退去を命じられた歴史が描かれたことなどについて、説明を受けた。

併せて、ブラジル文化勲章を受け、日系移民を代表する造形作家である故大竹富江作のブラジル日本移民100周年（2008年）記念のモニュメントを見学した。

波を模したモニュメントであり、大竹氏は赤を好んで使ったとのことであった。

#### （参考）日本移民ブラジル上陸記念碑

1908年6月18日に第1回ブラジル日本移民が笠戸丸でサントス港に上陸して以来、1973年の最後の移民船まで約24万人の日本人移民が上陸した。

記念碑は1998年にサントス・ボケロン海岸に建立され、橋本龍太郎元首相が揮毫した。その後2009年に現公園内に移設された。



日本移民ブラジル上陸記念碑



日系移民100周年記念モニュメント

## 日本移民史料館視察

- 1 日 時 令和5年9月9日（水）13：00～14：00
- 2 場 所 ブラジル日本文化福祉協会ビル7F～9F（サンパウロ市）
- 3 参加者 〔福井県議会〕  
西本正俊議長、畑孝幸議員、小堀友廣議員、西本恵一議員  
兼井大議員、松本次長、江守総務課主任秘書
- 4 応対者 ハマダ・ヒロコ氏（同行通訳者、同館に精通）

### 5 概 要

館内の展示品や移民の歴史などについて説明を受けた。

7階の展示場：移民到着前の歴史からコーヒー園等での労働、植民地「コロニア」の形成、農産物の拡大、医療体制の確保の歴史などが紹介

8階の展示場：日本移民による農業・工業活動や町づくりの始まり、第2次世界大戦期および戦後の移民を取り巻く情勢、日本企業の進出などが紹介

9階の展示場：日本とブラジルの各分野での交流についての紹介の他、東郷青児作の壁画「移民開拓風景」が展示

（以下、説明要旨（主なもの））

- ・日本人がブラジルに移住を始めたのが1908年である。背景として、ブラジルでは1888年に奴隷が解放され、農場で働く人が不足し、その解消のための政策であった。その頃、日本では人口が急増し、その対策が求められていた。
- ・全国で1,346人が移住してきており、その子孫が拡大している。都道府県別では、北海道と沖縄出身が多く、それぞれの県人会も強い。
- ・第1回移民船である「笠戸丸」は、病院用の船を改造して作られた。水野龍氏が率いたが、資金不足により出航が遅れ、本来のコーヒーの収穫時期の4、5月より遅れて到着したため、最初の移民は非常に苦労した。そのことで第2回は4年後になってしまった。
- ・最初に日本人が到着しとき、ブラジル人から一体どんな人々なのかと注目されたが、洋服を着て整列し、たばこを道に捨てたりするようなこともなかったため、ブラジル人から、美しく清潔な人々だと賞賛された。
- ・大武和三郎氏は、初めてポルトガル語、英語、日本語の辞書を作った人物。当時は大いに活用された。
- ・平野運平氏は、農場と移民との橋渡しをして、1回目の日本人の農地購入に貢献した（1915年頃）。ただし、日本人がその土地に稲を植えたところ、マラリアが蔓延して多くの人々が死んでしまい、稲もいなぎにやられてしまったという悲話がある。

- ・上塚修平氏は、その話を聞き、こうした悲劇を繰り返さないよう、よく調査して土地を購入し、成功した。
- ・初期の移民は野生動物に襲われる危険性と常に隣り合わせであった。当時、山の中で見つけた蛇を日本へ郵便で送り、それで解毒剤を作って治療に用いていた。日本人は、こちら特有の病気に罹りやすいので、日本人用の病院が建てられた。
- ・黒コショウは、ブラジル原産のものは質が悪かったが、小山明子氏（女優）の父が、シンガポールからたった3本の苗を持ってきて植えたものが広がり、のちにブラジルの大きな産業になったという話がある。
- ・農業協同組合は、通訳を仲介人として出して、農産物を販売していく働きをしていた（二世まではポルトガル語が話せないため、ブラジル人にだまされることがあった）。
- ・1912年に日本人が住み始めてから、わずか3年後の1915年には、日本人は学校を作った。勤勉で教育熱心な国民性が現れている。それ以降、第二次世界大戦までに、450もの日本人学校が生まれた。
- ・最初の移民は出稼ぎが目的であったが、戦争が起こったことにより、ブラジルに根を下ろそうということになったところもある。
- ・第二次世界大戦が始まると、日本人、ドイツ人、イタリア人は規制を受けた。日本人は外見ですぐにわかってしまうので、日本語を話すことは厳しく禁止され、レコードや本は没収され、ビザのようなものを持たないと隣町にも行けなかった。
- ・戦後も、ブラジル人が日本人を再度受け入れるまでには時間がかかったが、日本館がイビラプエラ公園にできるころ（1954年）になると、ブラジル人のわだかまりはなくなり、日本からも、ブラジルへオリンピック選手や演劇者を派遣するようになった。
- ・山本清氏は、コーヒー農園で、害虫の研究をして功績を残した人である。
- ・1950年代からは、日系人がブラジル社会の中に入っていく時代である。代表的なメーカー「J a c t o」の創業者は、京都出身で修理業を営んでいたが、周辺の農業用の噴霧器の修理ばかりを行う中で、自分のほうが良いものを作れると考え、会社を設立した。ブラジル政府から認められ、世界で初めてのコーヒーの収穫機械も作った。また、日本企業がブラジルに進出するきっかけになった。
- ・1980年代は、ブラジルでインフレがあり、外国への出稼ぎが始まる時代である。
- ・壁画「移民開拓風景」は、東郷青児が初期移民の苦闘（ブラジルで3カ月ほどをかけて聞いた話をもとに）を描いた大型（15×2m）の作品である。日本移民資料館開館を記念して寄贈された。

#### 《訪問議員による所見や提案》

- ・政府の移民勧奨によりブラジルに渡られた日本人の大変な苦労が偲ばれた。その方々が奮闘し荒野を切り開き、二世、三世の方々がその意思を引き継ぎ、努力されて政財界で活躍されていることが、ブラジル社会の中で日本への理解につながっていると考える。
- ・ブラジル人の学生も見学に来ており、日系社会のブラジルでの存在感を感じた。
- ・日本からの移民が、開拓、移住、農業生産、工業製品開発など段階的に発展を遂げられ、

一方で感染症や第二次大戦中の行動制限などの困難も乗り越えながら、ブラジルの産業界や政界での活躍、文化の振興に貢献をいただいていること、先没者慰霊碑の維持管理・運営など、時代を経ても先祖を大切にされていることにも敬意と感謝を表したい。

- ・上陸場所であるサントス港とサンパウロ市との間は、標高差もあり自動車でも移動に時間を要したため、移民の上陸後の移動についても当時多くの苦労があったと思われる。
- ・移民の方々の当初からこれまでの様々な困難について、興味深く分かりやすい展示と説明を受けた。日本移民史料館のホームページには展示の閲覧機能もあるが、ポルトガル語表記のみであるため、日本語訳版も作成して、子どもたちの国際化の学習につなげてはどうかと考える。



都道府県別の移民数



笠戸丸の模型



移民開拓者の家の模型（内部）



移民が作った農機具



日本人の入植地の地図（1926年）



日本人のための病院建設



農業協同組合の貢献者の像



日本企業のブラジル生産品



美智子皇后陛下(当時)がイペー(ブラジルの国花)を盛り込まれた御歌



壁画「移民開拓風景」東郷青児作